いのちと地域を守る

シンポで被災地支援の実情について語る海老原さん（右から2人目）と金田さん（同3人目）＝3月13日、仙台市青葉区の仙台国際センター

宗教者の役割 模索続く

考える

仙台で震災シンポジウム

東日本大震災の発生後、多くの宗教者が被災地に入り、被災者の支援に力を入れてきた。犠牲者を弔うだけでなく、被災者の精神的ケアや新たなコミュニティーづくりの一翼も担ってきた。布教と一線を画しつつ、復興にどう貢献するか。宗教者らの模索が続く。（盛岡総局・片桐大介）

3月13、14の両日、宗教の枠を超えてつくる「世界宗教者平和会議日本委員会」（東京）のシンポジウムが仙台市青葉区の仙台国際センターで開かれ、約130人が参加した。

布教と一線画す

英国国教会系の日本聖公会の信徒海老原祐治さん(51)は2011年6月、同会職員として釜石市で支援活動を始めた。13年10月に地元住民とボランティア団体「釜石支援センター望」を設立し、代表を務める。

「支援活動の際、布教を一切しないことが信頼感や安心感につながってきた」と海老原さん。市や地元の社会福祉協議会と連携し、災害公営住宅でのイベント開催やコミュニティーづくりを手伝ってきた。

宗教者による支援は、信仰に基づく覚悟があり、組織的で継続的な支援が可能となる半面、過度にのめり込んで心身を壊すケースもあるという。海老原さんは「心のバランスを取るため組織の支えが欠かせない」と指摘する。

曹洞宗通大寺（栗原市）の住職金田諦応(たいおう)さん(62)は、傾聴ボランティアの取り組みを紹介した。震災直後から移動喫茶室「カフェ・デ・モンク」を被災地で開いてきた金田さんは、新たな住宅地や災害公営住宅でコミュニティーをつくる難しさを痛感してきた。

金田さんは「明治維新以降、経済優先の社会がつくられ、人のつながりや地域の助け合いが軽視されてきた。そのひずみが震災で吹き出した」と指摘。「宗教者は社会のありようを問い続けなければならない」と提起する。

東京電力福島第1原発事故の不安を抱える人たちへの支援を続ける宗教者も少なくない。

一斉に祈りをささげる各宗教・宗派の代表者ら＝14日午後、岩沼市の千年希望の丘相野釜公園

弔いから交流形成 幅広く

「声なき声」発信

牧師らでつくるNPO法人被災支援ネットワーク・東北ヘルプ（仙台市）は、福島県内で心身の異常を訴える住民との面談や放射線に関する学習会を開催。ニュースレターやインターネットで活動を発信する。

事務局長を務める石巻栄光教会（石巻市）の牧師川上直哉さん(45)は「うめき声も上げられずに苦しむ人たちがいる事を、教会を通して世界とつながっている私たちが発信していきたい」と強調する。

河北新報社秋田総局の松田博英総局長(52)は、死者と生者の心のやりとりや被災者を支える宗教者を描いた連載「挽歌の宛先」（15年）を紹介。「被災地の伝統行事や民間信仰も重要だ。地域の人々の精神とつながっている」と話した。

シンポ終了後の14日午後、12の宗教・宗派の代表らが岩沼市の慰霊公園「千年希望の丘」に集合し、地震発生時刻の午後2時46分に一斉に黙とうした。

シンポ開催に協力した宮城県宗教法人連絡協議会の近藤雅則会長は「震災で宗教者としての新たな役割や使命に気づかされた。各宗教者が学びを深める機会は大切だ」と話した。

伝える

2011.3.11

■沖出しで大波にのまれる（石巻市）

石巻市鮎川浜でワカメ養殖と加工販売などを営む斎藤富嗣(とみじ)さん(58)は東日本大震災の発生時、鮎川港から船外機船「竜城丸」（0・7㌧）を沖出しした。津波の引き波や押し波に何度も襲われ、極限状態で命を取り留めた。「次の地震では二度と沖出しはしない」と語る。

斎藤富嗣さん

次々来る「壁」越える

3月11日はワカメ収穫の最盛期でした。浜で作業した後、自宅に戻り、茶の間に座った途端に激しい揺れに襲われました。「津波が来る」と直感しました。消防団幹部も務めていたため、浜に戻って人々に避難を呼び掛けました。

既に他の船が沖出しをしていました。津波が来たら沖出し―。地域で代々伝えられ、自分も急いで船を出しました。

海面が盛り上がり、恐怖で体が震えました。少し進んで振り返ると、防波堤や灯台、ワカメの養殖いかだなどが波にのまれ見えなくなっていきました。続いて「ザーッ」という音の引き波が始まり、がっちりと固定していたはずの養殖いかだが引っ張られ、目の前を流されていきました。

水平線を見ると、今度は前方から黒い壁のような波、金華山方向から青い波が押し寄せてぶつかり、所々でチューブを巻くようにして近づいてきました。小さな船ではもう耐えられません。覚悟した瞬間、後方から20㍍ほどの漁船2隻が進んできました。

この船が波を割っていく後ろに付けば乗りきれるかもしれない。波は高さ20㍍くらいに感じられました。船尾につき波を上り、後進に切り替えて下る。次々と押し寄せる壁のような波を3回越え、半島の先端付近に出ました。

横殴りの雪が降る中、金華山の海沿いで経営していた民宿が津波ですっかり流されているのが見えました。悲しみと恐怖でいっぱいになり、泣けてきました。

戻ろうと船を進めると、また波が押し寄せてきます。港付近の「おしかホエールランド」あたりまで流された後、再び湾内に戻り、知人の漁船に船をつないでもらい夜を明かしました。

家族は高台に避難して無事でしたが、地域は壊滅状態。震災前、警報が出ても津波は1㍍以下。どこかで「大丈夫」と過信していました。鮎川浜地区では今後、観光物産交流施設やホエールランドが完成する予定です。観光客誘致やにぎわい創出に取り組みながら、教訓を語り継いでいきたいと思っています。

津波で壊滅的な被害を受けた石巻市鮎川浜地区＝2011年

探る

■食から考える避難生活

栄養や衛生 多角的に

石巻専修大教授　坂田　隆さん

石巻専修大は東日本大震災発生直後の2011年3月末、「復興共生プロジェクト」を立ち上げた。学生・教職員の3分の1に当たる600人以上が被災者となった本学として、「支援」ではなく、被災地と一緒に立ち上がる思いを込めた。さまざまな研究や事業を展開する中で、欠かせなかったのが家政学、とりわけ食に関する視点だった。

私の専門は栄養生理学で、食物繊維や腸内細菌が主な研究対象だったが、震災で研究領域が一変した。私が日本家政学会の会員という縁で、大学と学会が協定を結び、仮設住宅や支援団体への聞き取りなどの研究を行った。

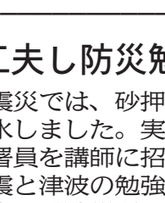
支援団体からの依頼で、被災者に提供した炊き出しメニューの栄養評価を実施した。制約の中でも肉や野菜など食材の種類を多くして、避難生活で不足しがちな栄養素の摂取をよく考えたメニューになっていた。

炊き出し支援の際に食中毒が心配されたため、災害時の食事における衛生面の注意を盛り込んだ「炊き出し衛生マニュアル」も作成した。インターネット上に公開し、16年の熊本地震、18年の西日本豪雨でも活用してもらった。

震災の甚大な被害は、身近な食に大きな影響を及ぼす。仮設住宅入居による食生活の変化に着目した研究を行った。地元食材の確保が難しくなり、台所や食卓が狭いこともあって郷土料理が作られなくなったことが分かった。食文化が消失する恐れがあり、被災者への聞き取りなどを基にレシピ本「たべる つくる 石巻」の春夏版を作成した。秋冬版も完成間近で、被災地の伝統食を守る一助になればと考えている。

家政学会との活動のほかにも被災した大学生の体重の変化や、石巻圏域の学校給食の震災後の復旧過程の研究も行っている。被災すると20歳前後の若者でも食欲の調節がうまくいかなくなることがわかった。また、学校給食の再開までには、食器の洗浄もままならない中、業者から弁当を取り寄せたり、使われなくなった他自治体の給食施設を借りたりするなど、現場の担当者の創意と工夫があったこともわかった。

せっかく大災害を生き延びても、被災者がその後の食生活で健康を損ない、地域食などの伝統文化が失われてしまえば、被災者や被災地の復興は十分なものとは言えない。各地で災害が相次ぐ中、このように食を多角的に考える視点を大切にしたい。



さかた・たかし　東北大大学院農学研究科博士後期課程修了。ドイツの大学教員、食品メーカー研究員、フランスの招待研究者を経て、89年石巻専修大理工学部助教授、96年教授。理工学部長を経て、07～16年に学長。専門は比較栄養生理学。名古屋市出身。68歳。

現場から

テーマ工夫し防災勉強会　多賀城市鶴ケ谷地区婦人防火クラブ会長　加藤　律子さん(59)

東日本大震災では、砂押川からの津波で自宅が浸水しました。実は震災の半月前に、消防署員を講師に招き、住民を対象にした地震と津波の勉強会をしたばかり。教えを守って防災グッズを用意した人は、避難後3日間は不自由なく過ごせました。

防災・防火を学ぶ勉強会は毎年度1回開いており、震災直後は75人も参加しましたが、その後は減少傾向で35人という時もありました。前年度は火災が多いイメージがあり、住宅用火災報知機の最新情報を学びました。関心の高いテーマを探り、今後も勉強会を続けたいですね。

12万人超に震災体験語る　石巻観光ボランティア協会会長　斎藤　敏子さん(77)

東日本大震災後、石巻観光ボランティア協会として「大震災学びの案内」に取り組み、石巻市を訪れた修学旅行生らに防災・減災の大切さを伝えています。これまで約12万3000人に震災体験を語ってきました。震災時は揺れの恐怖にぼうぜんとしてしまい、防災無線から警報が流れるまで、津波が来るとは考えませんでした。防災訓練はしていましたが、災害の知識が乏しかったからです。学びの案内では自分の失敗談を交えて説明しています。4月は北海道の中学校2校が訪れます。減災につながる知識を吸収し、命を守るために生かしてほしいです。